



三彩立女俑 中国・唐時代
高さ41.0cm.

中国の長い歴史の中で、唐時代ほど、中国らしい大きい規模をもって豊麗かつ高貴なる文化の花が咲き揃ったような時代は他にありません。

私は、そういう唐朝文化を象徴するかの如き、貴人や美女達の彩色麗わしき土製の人形、いわゆる唐の土偶の類が、沢山に当時、鄠長安や洛陽などから発掘され、日本にももたらされて、私共の眼にも触れ、日本美術においては見

ことの出来ない大陸的な豊麗さに、私共は全く眼を驚かしたことを、今もなおよく記憶しております。

そういう唐俑には、男もあり、女もあり、馬や狗や豚や駱駝もあり、駱駝を曳いて来た異様な服装の胡人や西域人もあり、あるいはまた人間としては、武人もあれば、宮廷に流行した鷹匠などもあり、即ちほとんどあらゆる種類の唐朝の生活や民間風俗を示しているのです、唐朝文化に憧れていた私どもにとっては唐朝文化のいわば世界性なるものが、まのあたり立証されているのを見せられたようなもので実に面白いことでした。

これを唐の美人俑に限って眺めると、その中にしばしば見出されるいわゆる樹下美人型は、初めから私が好きでたまらなかったものだけに、北京の骨董屋廻りをした時にも、絶えず注意を払って見て歩いたものでありましたが、さすがに日本にはそういう姿美しく顔麗わしき佳品が比較的多く渡って来ているようで、それは日本人の神経質なる厳しい好み

の結果でありましょうが、日本のためには結構なことでした。

その中で、私がこれこそ世界一と信じたのは、細川護立侯所蔵の豊か

に頬笑むが如き立女俑でありました。若々しい美人の肌や豊かな肉付きや、そしてその厚化粧とを遺憾なく生かし出していて、艶治の限りでありました。頬は円く紅粉をもって彩り、周囲をぼかし、その上に胡粉で白く花鈿を描き、眉間には、大きな朱色の花形の点彩があり、また柔くなまめかしくも結ばれた朱唇、等々、何たる愛嬌でありましたでしょう。すべてこれ、人生の幸福感を集中したような豊麗味の堆積であるかの如く思われました。

私はこの立女俑を細川家の書斎において初めて見た時の驚きと幸福感を今もまざまざと思い出します。その書斎には書物の他には美術品は何一つ見えず、ただこの像のみが一朶の富貴なる花の如く、艶然として佇むばかりでした。書斎にただ一人いて、折ふし書見に疲れた眼を、ふとこの美人像の上に落とすのは、大した幸福だな、と想いました。それ以来、私の空想美術館中の最高位の一つをその唐美人俑に与えて心より鍾愛しております。その考えは今もって変わりませんが、戦後のある日、私は東京のある美術商のところで梅原竜三郎君が描いたこれとそっくりの唐美人俑の油絵を見つけました。それで私は「梅原君が細川家の像を借りて描いたね」と言うと、美術商は「いえ、違います。非常によく似ていますが、実は別の像がもう一つあるので、それを描いていただいたのです」という。私は一寸変な気がして「そうか、そんな同じような像が別にあったのかい」と問うと「それではお目にかけましょう」ということになって、取り出されたのは、細川家の像と見紛うばかりによく似た唐美人俑の絶品でありました。聞くところによると、これは細川家の像と共に本来一対で発掘され、共に日本にもたらされ、美術商はそれを別々にして、一体を細川家に納め、他は某大家に納めて今日に至ったが、戦後の経済界の大変動は、某大家が大きいだけにそれだけ打撃も大きく、この唐美人の絶品も内緒で売りに出されたとの話でした。私がそれを殆んど即座に大和文華館のために購入したこと、言うまでもありません。

大和文華館蒐集ものがたり⑤

唐三彩立女俑

大和文華館々長 矢代幸雄

季刊 美のたより No.9

昭和44年 4月1日

発行 大和文華館